論　説

ことわざに於ける「敬鬼神而遠之」の朝鮮的解釈の考察

金　　敬　雄

一、はじめに

손재선（ソンゼェソン）編集の『우리말속담큰사전』（我が国語ことわざ大辞典）[1] では「귀신도　공경하면　멀리　간다.」（鬼神も敬してあげれば、遠ざかっていく）ということわざを挙げ、それの出典が『論語』の「敬鬼神而遠之」であると記してある。

『論語』の雍也篇に次のようなことが記載されている。

樊遲問知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣。

この部分について、古注系統のものである何晏の集解では次のように解釈している。

包曰、敬鬼神而不黷。

そして、邢昺の疏では次のように解釈している。

正義曰、此章明仁知智用也。樊遲問知者、弟子樊須問於孔子、何為可謂之知。子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣者、孔子答其為知也。言當務所以化道民之義、恭敬鬼神而疎遠之、不褻黷。能行如此、可謂知矣。

新注では朱子は次のように程子の解釈を引いている。

程子曰、人多信鬼神、惑也。而不信者、又不能敬。能敬能遠、可謂知矣。

また、中期朝鮮の思弁哲学者栗谷は次のように諺解を施している。

鬼神을　敬코　멀리ᄒᆞ면　可히　知라니를　디니라.
（鬼神を敬して遠くにすれば、知というものを身に備えることができる。）

これらいずれの解釈に於いても人間が鬼神を敬する主体であり、同時に遠ざける主体でもある。人間が鬼神を敬してあげれば、鬼神が自ら遠ざかっていくような内容は見あたらない。即ち、『論語』の中の「敬鬼神而遠之」についての従来の解釈と朝鮮のことわざに於ける解釈とは異なるのである。

上のことわざと類似するものとして、『한국의　속담　용례사전』（韓国のことわざ用例辞典）(2)、『한국속담　활용사전』（韓国ことわざ活用辞典）(3)、『朝漢成語諺語詞典』(4) などには共に「귀신도　빌면　듣는다.」（鬼神もお願いすれば聞いてくれる）ということわざが載っている。そのほか、『한국의　속담　용례사전』（韓国のことわざ用例辞典）には「귀신도　빌면　돌아선다.」（鬼神もお願いすればやり直す）ということわざもある。この二つのことわざには、表現の違いは若干あるものの、鬼神が人間の祈願を受け入れてくれるものだという認識に於いては、上に挙げたことわざ「귀신도　공경하면　멀리　간다.」（鬼神も敬してあげれば、遠ざかっていく）とまったく同じである。

二、朝鮮に於ける鬼神への姿勢

東アジアに於いて、現在も鬼神に関する議論が非常に多い。朝鮮の鬼神に関しての議論も今まで多かった。しかし、私はここでそういう鬼神論を論じるのではなく、むしろ朝鮮では民族的に鬼神をどのようなものとして捉え、鬼神に対してどのようなスタンスを持っていたかを考察してみたい。

朝鮮のことわざ「귀신도　공경하면　멀리　간다.」（鬼神も敬してあげれば、遠ざかっていく）の出典が『論語』だとされているが、どうして中国に於ける従来の解釈及び栗谷の諺解などとは異なる意味で受容されたのだろうか。

このことを朝鮮に於ける伝統的な鬼神観という文化的側面から考えてみたい。

『後漢書』八十五列傳第七十五の三韓の条に当時の朝鮮について次のような記録がある。

> 常に五月に田植えが終わると鬼神を祭る。一晩中酒会を行い、大勢集まって歌舞をする。舞うと数十人伴い、地を踏んで拍子を取る。十月に農事が終わると、又同じことを行う。諸国邑において、一人を以て天神を祭り、天君と号し、また蘇塗を立てる。大木を立てて鈴鼓を懸け、鬼神に事える。(5)

ここで言っている鬼神は一体いかなるものかはっきりしないが、少なくとも朝鮮には三世紀頃にすでに鬼神を祭る習慣があったことが窺える。

鬼神を祭る風習は、仏教王朝である高麗においても、また儒教を建国理念にしていた李朝においても、巫俗信仰の形で継承されてきた。

尹以欽氏は韓国の民族宗教について次のように述べている。

> 世界的な宗教の外に、韓国社会において巫俗ないしシャーマニズムといったような先史宗教から19世紀の価値観の激変期以後に現れた数多くの民族宗教までが共存している。(6)

このことは、朝鮮では、外来文化を受容していると同時に、自民族の伝統文化も根強く継承していることを意味している。

朝鮮にはさまざまな鬼神観があるが、本稿では人間に病気や災いなどをもたらす主体を鬼神とする民間に於ける鬼神観を考察し、それが朝鮮のことわざに於ける「敬鬼神而遠之」の解釈とどう関わるかを考えてみたい。

（一）『三国遺事』に於ける鬼神の扱い方

『三国遺事』は高麗の禅師一然が著したもので、正史『三国史記』と共に朝鮮に現存する最古の野史である。『三国遺事』に収録してあるものの多くは逸事か、あるいは伝説的、伝奇的、説話的なものである。まずその中から「桃花

女　鼻荆郎」及び「處容郎　望海寺」を取りあげてみたい。

１．桃花女　鼻荆郎[7]

第二十五代、舎輪王の諡号は真智大王で、姓は金氏、妃は起烏公の娘、知刀夫人である。大建（陳の宣帝の年号）八年丙申（五七六年）に即位した［古本には、十一年己亥となっているが間違いである］。国を治めること四年で、政治がはなはだしく乱れたために、国の人が王をやめさせてしまった。

これより先、沙梁部に百姓の女がいた。姿かたちがあでやかに美しかったので、当時の人びとは彼女を桃花娘と呼んでいた。王がこれを聞いて、宮中に呼び寄せてから、犯そうとすると、女が言うには「女が守らなければならないことは、二人の夫に仕えないことでございます。夫があるにもかかわらず、他の人に身を任せるようなことは、たとえ万乗の君の威厳をもってしてもできないことであります。」王が「お前を殺したらどうするか」というと、女は「たとえ殺されて、さらし首になってもかまいません」。王が戯れて「夫がいなければよいのか」と言うと「それならかまいません」と女が答えたので、王は許して帰してやった。この年、王は廃位させられ、また世を去ったが、その後三年立って、彼女の夫も亡くなった。

（夫が死んでから）十日たった日の夜中に、王が生きていたときと同じように、ひょっこり女の部屋に現れて、「そなたが以前、承知したとおり、今はそなたの夫もいなくなったのだから、（私と寝ても）いいだろう」と言うのであった。女は軽々しく返事できなかったので、このことを両親に聞いてみると、「王様のお言葉にどうして逆らえようか」と言って、娘をその部屋に入らせた。七日間、王にお仕えして留まっているあいだ、いつも五色の雲が屋根をおおい、香気が部屋いっぱいに満ちていたが、七日後ふいに王の姿が消えてしまった。女はそれから身ごもった。月が満ちて生まれようとするとき、天と地とが揺れ動き、やがて一人の男の子が生まれ

た。名前を鼻荆（鬼神）とつけた。……。[8]

この物語の中で、桃花娘の両親は、死んで鬼神となった王を生前同様に王として扱っているが、これは即ち鬼神に対する尊敬行為なのである。そして、これに対して、鬼神である王様が自ら消えてしまう。そればかりか、このことで、めでたく男の子が生まれ、後にこの子が鬼神たちを操って橋をかけたり、政治まで助けたりするぐらいである。最後には、この子を歌った詩を貼って邪鬼を追い払う風習までできる。

この物語には鬼神に対して敬してやると、鬼神は自ら消えていくという鬼神観が現れている。

2．處容郎　望海寺

第四十九代、憲康大王の時代には、京師から海の入口に至るまで、家と塀とがあい連なり、草ぶきの家は一軒もなく、道には笛の音、歌の声が絶えることがなく、風と雨が四季を通じて順調であった。

そのころ大王が、開雲浦[鶴城の西南にあり、今の蔚州である](今の慶尚南道蔚山)に遊んでから、帰る途中、昼になったので川辺で休んでいると、にわかに雲と霧が立ちこめて道さえ見わけられないほどになった。怪しんで左右のものに聞くと、日官(観象庁の役人)が「これは東海の竜の仕業であるから、なにかよいことをしてこれを解くべきであります」と申しあげた。そこで担当の役人に命じ、竜のために近所に寺を建てるようにさせた。王の命令が下りると、雲は晴れ霧が散った。それでそこを開雲浦と名づけた。東海の竜が喜んで子供七人を従えて王の前に現れ、徳をたたえながら舞い、音楽を奏でた。そのうちの一人の子供は王につれられて都にのぼり、政事を補佐した。名前を処容と言った。王は美しい女を彼に娶らせて留めおき、級干の職を与えた。

彼の妻があまりにも美しかったので、疫病神が惚れこみ、人の姿に化け

て、夜その家に行きこっそり共寝をした。処容が外から家に戻ってきて、寝室に二人が寝ているのを見ると、歌を歌いながら舞いを舞い、そこから出て行った。その歌はつぎのとおりである。

みやこ、月の明き夜、遊びて、夜ふけ帰れば、
わが寝室、内に脚よつ、
ふたつは、女房の、残りふたつは、誰がもの、
もとわれのものとて、盗られては、はて術もなし。

その時、（疫）神がもとの姿を現して前に跪いていうには、「私は公の妻に恋慕していま過ちを犯してしまいました。だがあなたは怒ろうとしない。ありがたく見あげたことでございます。誓って今後は、貴公の姿を描いたものさえ見れば、決してその門の中には入りません。」このことがあってから、国の人びとは処容の姿の絵を門に貼って、邪鬼を追い払い、幸運を迎えいれるようになった。

王が京師に帰られてから、霊鷲山（今の慶尚南道の蔚山）の東の麓の景色のいい地所を択んで寺を建て、（寺名を）望海寺または新房寺とつけた。これは竜のために建てたものである。……。[9]

この説話の中で竜は、超人間的で、また超自然的な能力の持ち主として登場する。朝鮮では、早くからトーテムの思想があり、朝鮮の開国神とされている檀君も熊と人間の間で生まれた存在である。同じ『三国遺事』の中に「水路夫人」[10]という説話があるが、この中でも龍が登場する。水路夫人が海辺のある亭子で昼食を取っていたら、海の龍が出てきて、夫人をさらって海の中に入ってしまう。それで、ある老人が言った通りに、その地方の人たちを呼び集めて、歌を歌いながら、棒で岸を叩いたら、龍が夫人を捧げてきてさしだしてくれたという話である。

徐廷範氏は著書『韓国のシャーマニズム』の中で次のように言う。

シャーマニズムにおける神の序列を大別すれば、天神・山神・竜神の順

位になるであろう。そして一番下位の神が、明図などの人神である。シャーマニズムの神観は垂直的であるから、宇宙的だといえよう。天神・山神・竜神の中で、具体性のあるものは山神の化神という虎である。(11)

即ち、朝鮮のシャーマニズムに於いては竜神の存在が認められているのである。「望海寺」、「水路夫人」の中では龍は災いをもたらす役として登場してくる。その龍に対して「望海寺」ではお寺を建立し、「水路夫人」では大勢の人が歌を歌いながら、棒で岸を叩くと、龍が人間の願いを叶えてくれる。

また、「處容郎」では、處容が誰か自分の妻と寝ているところを見て、怒るどころか、歌を歌い、舞を舞いながらその場を離れて行くと、疫神が自らお詫びをして、二度と處容の前にその姿を現さないと誓って消えていく。處容の行為について成澤勝氏は「處容歌」の持っている歌の呪力を強調し、呪力信仰の角度から捉えている。(12) 一方、孫晋泰氏は處容の行為について次のように論じている。

神が人を犯すと言うのは、人が神の憑依によって病気に懸かるようになると言う意味である。美妻を犯したと言うから、我々は犯す者の神的存在を忘れて、いきなり性的な交接でそれを直感してしまうが、神が人妻を性的に犯すはずがないから、この「犯」という字は疫神が處容の妻に憑依して、病をもたらしたというふうに解釈したほうが妥当なのである。即ち、處容は彼の妻が疫病にかかったので、疫神に歌舞祈祷をした。これがこの説話である。(13)

孫晋泰氏はこの説話に現れる疫神の行為が病気をもたらしたことであり、處容の歌舞は疫神に対する祈祷であると論じている。本論考では孫晋泰氏の説に賛同し、處容の歌舞を疫神に対する敬的な行為として捉えている。そして、この敬的な行為によって疫神がお詫びして遠ざかっていく結果を得たことに注目しておきたい。

以上は、『三国遺事』の説話を通して人間に病気をもたらすと思われる疫神、または、人間に災いなどをもたらしてくると思われる対象に対して、朝鮮ではどのような行動を取っていたかを見てきた。

（二）　李氏朝鮮の場合

ところで、儒教を国の基本的な理念にしていた李朝では、鬼神をどのように扱ったのだろうか。

朴桂弘氏は李朝に於ける巫俗信仰について次のように述べている。

> 李朝社会では儒教を崇拝することが最高の生活であるという観念が上下に満ちていたから、最小限、表面的には巫俗を淫祀だと決めつけて、度外視するような態度を取らざるを得なかった。しかし、その内面においては、近世の人々の中には中世の人々に負けないほど巫俗信仰思想が残っていたことが分かる。(14)

李朝は儒教を建国の理念にし、中国文化への崇拝志向が非常に強かった。しかし、社会の根底には伝統的な文化が依然として存在し、時には国王までそれを表に持ち出すほど、社会に影響力があったのである。

「英祖実録」には次のような記録がある。

> 英祖が食卓でこんなことを言った。「大体民間では病気になるとすぐ巫堂を呼んだりするが、それは役に立たず、実は薬だけがほんとうに効果があるのである。」(15)

この記録から、李朝時代に民間に於いて巫俗信仰が流行っていたことが窺えるし、また病気を鬼神と関連づける様子も窺えるのである。

次は、更に『李朝実録』を通して、当時の鬼神観を考察してみたい。

「宣祖実録」にはこのように記録されている。

備辺司から次のような提議があった。

「都の中には、戦乱と飢餓で死んだ人が数え切れないほどである。欝気が重く滞って、伝染病が発生した。近ごろ、民間ではそのために死んだ人が非常に多い。礼曹に命じて城外に壇をいくつか作って、祭を行って怨みを持って死んだ人の霊を慰めて、重く滞っている気を発散させることが適当のようである。」

宣祖はこれを受け入れた。(16)

ここで、明らかに伝染病の原因を欝気が重く滞っているからだとしている。そして、その退治措置としてはわざわざ壇を作り、霊祭を行うことを薦めているが、宣祖がそれを受け入れたところから、この時代に、朝廷内においてもこういった鬼神観があったことが分かる。

「顕宗実録」には、次のように記録されている。

これに該当する官庁に命じて、都の北の方に祭壇を作り、祭を受けられないあらゆる地域の鬼神たちも祭るようにすると同時に、当該地域の城隍神に鬼神たちを集めさせ、この祭を担当させた。お前ら鬼神たちは仲間を呼んだり、友達を連れてきたりして、これらのご馳走を食べよ。災害を起こしたり、和気を損害したりするようなことはしてはならない云々。(17)

これは顕宗が祭祀を命じ、祭祀文について言った話である。この祭祀文には鬼神を祭る目的が実に明らかに出ている。それは鬼神にこれからは災害を起こさないことを願うためである。つまり災害を起こしたり、和気を損害したりするのは鬼神の仕業だと捉えられているのである。人々が鬼神に対してこういう行為を取るのは、鬼神を敬すれば、鬼神は人間の願いを聞いて退散してくれると信じていたからに外ならない。

「英祖実録」にはまた次のような記録がある。

各道に命じて、伝染病に対する祭りをあまねく行うようにした。その時

伝染病が流行り、あちこちで人が絶えず死んでいた。特に嶺南、嶺東、関北がたいへんひどく、民家の七、八割が空だったと言われている。(18)

ここでははっきりと「鬼神」とは言っていないが、伝染病を退治する手段として、祭るという儀式を行っていたことから、伝染病の正体を鬼神として認識していたことが窺える。祭るということはその対象物にご馳走を捧げたり祈願することだから、それが敬の行為として捉えられるのである。すなわち伝染病を止めるために、伝染病の正体である鬼神に敬をはらい、鬼神に遠ざかってもらおうとしたものと考えられる。

（三）　近代の祭祀に於ける鬼神

昭和四年、村山智順氏が朝鮮総督府の嘱託で、朝鮮文化の研究資料として調査したものをまとめて本にしたのが『朝鮮の鬼神』である。

『朝鮮の鬼神』の第二編禳鬼編では防鬼退鬼の方法として十五種類も挙げてあるが、ここでは主にその中の「供物法」と「恭順法」に注目してみたい。

まず、「供物法」については、「供物法は鬼神に飲食物乃至衣服等のものを餐供して、鬼神の所害を免れむとする方法である。」(19) と定義してある。この「供物法」に属するものをこの本では、各地で風習として伝わっている例を55項目と、新聞に載せられた記事及び調査から得た実例を９項目を挙げている。その中からいくつか挙げてみると、次の通りである。

1．急に腹痛、頭痛等起りたる時は（これ客鬼と称する鬼神の所為なるが故に）粥を焚き門外に棄つれば全治す。／（忠清北道堤川地方）

2．正月十五日餅を作り里洞界にある木に黄、白、赤等の布片を結びつけ、餅を供へて祈念せば、家内一年中病魔に襲はるることなし。／（忠清地方）

3．風邪は四方の神を呼びながら飯を撒けば全快す。／（慶尚北道地方現行）

4．痘瘡は青竹にて馬を作り其上に飲食物を乗せ、之を村の端へ引出し送別宴を催せば全治す。/（全羅南道地方現行）

5．天然痘にて死亡したる者は天命なるが故に其の死体を直ちに埋葬すれば其の家に該患者続発す、之を避けんとせば其の死体を天に奉る意味にて三四日間樹に吊し置き後埋葬すれば後患なし。/（京畿道地方現行）

次に、「恭順法」というのは、「これは鬼神を尊敬し、鬼神に依頼し乃至鬼神の意に添ふべく謹慎する等、専ら恭順の態度、恭敬の意を表する事に依って鬼神の憐みを哀乞し以てその冥罰を免れむとする方法である。」(20)

「恭順法」に属するものは、各地で風習として伝わっているものを25項目を挙げている。次はその中の例をいくつか挙げてみることにする。

6．痘瘡は神の授くる悪病なれば、此の病気流行の際は良神に祈祷を為せば決して罹病することなく、且つ罹病者は忽ちに全治するものなりとて祈祷をなす。/（黄海）

7．病人続発する時は家族の一人、深夜他人の知れざる様窃に身体を冷水にて清め、山に登りて山に治癒を祈ること一週間或は二週間継続するときは其の痴病治癒す。/（慶南）

8．コレラ病流行の際、十字路に於いて犬を殺し道神をまつる時は其部落に該病発生せず。/（江原）

9．病気は一週間祈祷をなせば全治す。/（平南）

10．家中に誰れか病気に罹り、或は何事か失敗することあるときは、神様の侵害する（祟る）ものなりとて巫女等をして三四日間、豚を殺して馳走を作り、歌舞音曲を以て祈祷を為せば全治すと。/（平北）

上に挙げた用例で分かるように「供物法」では、主に飲食物等を鬼神に捧げているのに対して、「恭順法」では、何か物を捧げているが、どちらかと言うと心をこめてお願いをする点が特徴になっている。このことは、用例の中に「祈祷」という言葉が頻繁に使われているところからも窺うことができる。し

かし、「供物法」にしても、「恭順法」にしても、その本質的なところは変わりがない。

これらの調査資料から次のような共通点を窺うことができる。(1)病気の予防及び治療方法であること。(2)何らかの形で鬼神に敬意を表すこと。(3)そのことによって病気が治る（即ち鬼神が退散する）こと。

即ち朝鮮では病気の原因は鬼神の仕業だと考えている。そして、そういう鬼神に対して、人間が自分の力で退治するのではなく、それに恭順することで、鬼神に自ら遠ざかっていくことを願っているわけである。

この調査資料を通して、敬鬼神の風習が局地的な現象ではなく、忠清北道、黄海道、慶尚南道、慶尚北道、全羅南道、江原道、京畿道、平安北道、平安南道というふうに実に広い範囲で行われていたことが分かる。そして、これらの風習が調査を行った年代に於いて現行していた例が数多くあるということは、こういう風習が少なくとも今世紀の20年代頃に於いてもまだ根強く生きていたことを意味しているのである。

三、結び

以上の考察を通して、朝鮮では鬼神を敬する風習が民間信仰の重要な内容として次から次へと根強く伝えられてきたことが分かる。その中から次のような特徴を知ることができる。

１．病気をはじめ、人間社会に起こっている災いを鬼神の仕業だとすること。

２．鬼神は敬してやれば、人間の願いを叶えてくれると信じていること。

民間信仰の一つである巫俗の重要な機能の一つが治病することである。巫俗が今日まで民衆生活の根底に存続しているのは朝鮮に於ける以上のような鬼神観と深い関わりがあるものと思われる。病気を鬼神の仕業だと認識することが、直接的に鬼神への扱い方に影響を与えている。人々は鬼神がもたらしている災害から救われるために、鬼神を敬し、鬼神を祭るのである。

秋葉隆氏や依田千百子氏がすでに指摘しているように、[21] 朝鮮では社会、文化が二重構造になっていた。朝鮮では上流階層に於いて、中国文化を崇拝する志向が強かったため、言語表現もまったく漢文であった。一方庶民階層に於いては伝統的な民族固有の言語が使われていた。特にことわざは上流階層からは軽蔑される対象になっていた。即ち、ことわざはもっぱら庶民の文化として発展してきたものである。そのため、上流階層では「敬鬼神而遠之」の解釈を従来の中国の解釈を踏襲したにもかかわらず、庶民階層では上で見てきたような伝統的な鬼神観が根強く存続したため、その伝統的な鬼神観と相反する意味の「敬鬼神而遠之」を受容する際、それを自分たちの固有の観念に合う形にしてしまい、その結果、『論語』の中の「敬鬼神而遠之」が朝鮮のことわざでは「귀신도　공경하면　멀리　간다.」（鬼神も敬してあげれば、遠ざかっていく）に変容されたものと考えられる。

注：

(1) 손재선　엮음　『우리말속담큰사전』（교육출판공사　1993.8.25）。その序によると、本辞典に収録されていることわざは著者が25年間の年月をかけて、年輩の方々との対談をはじめ、新聞、雑誌、放送など広い範囲から集めたものである。また以下の書物を参考にしたことも記している。

金思燁・方鐘鉉編『俗談大辞典』朝光社　1940年

高橋亨譯『朝鮮俚諺集』日韓書房　1914年

李基文編『俗談辞典』民衆書館　1962年

최학근편『속담사전』경학사　1972年

李一善編『韓国俗談集』瑞文堂　1973年

(2) 정종진　엮음　『한국의　속담　용례사전』태학사　1993.3.15

(3) 김도환　편저　『한국속담　활용사전』한울아카데미　1993.6.5

(4) 対外貿易大学朝鮮語教研室『朝漢成語諺語詞典』商務印書館　1986.12

(5) 『後漢書』八十五列傳巻七十五東夷傳・三韓条：「常以五月田竟祭鬼神、尽夜酒会、群聚歌舞、舞輒数十人相随、踏地為節、十月農功畢、亦復如之。諸国邑、

各以一人主祭天神、号為天君。又立蘇塗、建大木以懸鈴鼓、事鬼神。

(6) 尹以欽『韓国宗教研究』巻１（集文堂　1991.8.15）p.263「世界宗教들　이외에도　우리　사회에는　巫俗내지　사머니즘과　같은　이른바　先史宗教에서부터　19세기의　가치관의　격변기　이후에　나타난　수　많은　民族宗教들이　공존하고　있다.」

(7) 日本語訳は一然著・金思燁訳『三国遺事』（六興出版　昭和55.12.10）によっている。以下注省略する。

(8) 『三国遺事』巻第一　紀異第一「桃花女　鼻荆郎」：第二十五舎輪王。諡真智大王。姓金氏。妃起烏公之女、知刀夫人。大建八年丙申即位。［古本云十一年己亥。誤矣］。御国四年。政乱荒淫。国人廃之。前此、沙梁部之庶女、姿容艶美。時号桃花娘。王聞而召致宮中。欲幸之。女曰、女之所守、不事二夫。有夫而適他、雖万乗之威、終不奪也。王曰、殺之何。女曰、寧斬于市、有願靡他。王戯曰、無則可乎。曰可。王放而遣之。是年王見廃而崩。後三年其夫亦死。浹旬忽夜中、王如平昔、来於女房曰、汝昔有諾。今無汝夫、可乎。女不軽諾。告於父母。父母曰、君王之教、何以避之。以其女入於房。留御七日。常有五色雲覆屋。香気満室。七日後忽然無蹤。女因而有娠。月満将産。天地振動。産得一男。名曰鼻荆。……。

(9) 『三国遺事』巻第二　紀異第二「處容郎　望海寺」：第四十九、憲康大王之代、自京師至於海内。比屋連墻、無一草屋。笙歌不絶道路。風雨調於四時。於是大王遊開雲浦。王将還駕。晝歇於汀辺。忽雲霧冥曀。迷失道路。怪問左右。日官奏云。此東海龍所變也。宜行勝事以解之。於是勅有司、為龍剏佛寺近境。施令已出。雲開霧散。因名開雲浦。東海龍喜。乃率七子現於駕前。讃徳献舞奏楽。其一子随駕入京、輔佐王政。名曰處容。王以美女妻之。欲留其意。又賜級干職。其妻甚美。疫神欽慕之。變為人。夜至其家。竊與之宿。處容自外至其家。見寝有二人。乃唱歌作舞而退。歌曰。東京明其月良夜入伊遊行如可入良沙寝矣見昆脚烏伊四是良羅二肹隠吾下於叱古二肹隠誰支下焉古本矣吾下是如馬於隠奪叱良乙何如為理古。時神現形、跪於前曰、吾羨公之妻。今犯之矣。公不見怒。感而美之。誓今已後、見畫公之形容、不入其門矣。因此、国人門帖處容之形。以僻邪進慶。王即還。乃卜霊鷲山東麓勝地置寺。曰望海寺、亦名新房寺。乃爲龍而置也。……。

(10) 『三国遺事』巻第二　紀異第二「水路夫人」：聖得王代、純貞公赴江陵太守

〔今溟州〕行次海汀晝膳。傍有石嶂。如屏臨海。高千丈。上有躑躅花盛開。公之夫人水路見之。謂左右曰、折花献者其誰。從者曰、非人跡所到。皆辞不能。傍有老翁牽牸牛而過者。聞夫人言折其花。亦作歌献之。其翁不知何許人也。便行二日程。又有臨海亭。晝膳次、海龍忽攪夫人入海。公顛倒躄地。計無所出。又有一老人。告曰、故人有言、衆口鑠金。今海中傍生。何不畏衆口乎。宜進界内民。作歌唱之。以杖打岸。則可見夫人矣。公從之。龍奉夫人出海献之。公問夫人海中事。曰、七賓宮殿、所饌甘滑香潔、非人間煙火。此夫人衣襲異香。非世所聞。水路姿容絶代。毎経過深山大澤。屢被神物掠攬。衆人唱海歌詞曰、亀乎亀乎出水路、掠人婦女罪何極、汝若傍逆不出献、入網捕掠燔之喫。老人献花歌曰、紫布岩乎邊希執音乎手母牛放教遣吾肹不喻慚肹伊賜等花肹折叱可献乎理音如。

(11) 徐廷範著『韓国のシャーマニズム』(同朋社　1980.4.15) p.53

(12) 松島隆裕、成澤勝、松田弘、渡辺治著『東アジア思想史』杉山書店　昭和57.4.1 (p.87を参照)

(13) 『新生』第3巻第1号(新生社京城　昭和4.1) p.17

「神이 사람을 犯한다는 것은 사람이 神의 憑附로 因하여 病을 엇게된다는 意味이다. 美妻를 犯하엿다함으로 우리는 犯한 者의 神的存在임을 忘却하고 단박에 性的交接으로 그것을 直覺하여 비리지마는、神이 人妻를 性的으로 犯할 理는 업슴으로 이 犯字는 疫神이 處容의 妻에 憑附하여 病을 주엇다는 意味로 解釋하는 것이 妥當한 理路일것이다. 卽處容은 그의 妻가 疫病에 걸넛슴으로 疫神에게 歌舞祈禱하엿다는 意味 이 說話이다.」

(14) 『韓国民俗学』4 (民俗学会　1971.6) p.23

「李朝社會는 崇儒의 生活만이 最上의 生活이라는 觀念이 上下에 充滿하게 됨으로써 最小限 表面的으로는 巫俗을 淫祀라 規定하고 이를 度外視하려는 態度를 取하지 않을 수 없게 되었던 것이다. 그러나 그 裏面에 있어서는 近世人들에게도 中世人들 못지 않은 巫俗信仰思想이 殘在하여 있었음을 알 수 있다.」

(15) 『英祖実録』巻一百六　四十一年乙酉十二月・癸亥条：上於診筵教曰。凡閭巷之有疾病者、輒用巫覡、果無益、医薬実有効矣。

(16) 『宣祖実録』巻五十二十七年甲午四月：備辺司啓曰。「都城之中、死於兵革、

飢餓者不知其数。冤其薫蒸、發為癘疫。近日間閻之間、因此死亡者尤多。令禮曹、於城外築壇数処、設為厲祭、以慰冤之鬼、以散滞欝之気、以為便當。」上従之。

(17)　『顕宗実録』巻五　三年壬寅五月：命有司。為壇於城北、遍祭闔境無祀鬼神。仍使當処城隍之神、召集群霊、以主此祭。惟爾衆神、挈朋携儔、来享飲食、無為厲災、以干和気云々。

(18)　『英祖実録』巻一百十四　四十六年庚寅正月：諭諸道、遍設癘祭。是時、癘疫熾蔓、八路死亡相続、嶺南東関北尤甚、民戸十空七八云。

(19)　朝鮮総督府編『朝鮮の鬼神』(国書刊行会　昭和47.6.20) p.304

(20)　朝鮮総督府編『朝鮮の鬼神』(国書刊行会　昭和47.6.20) p.323

(21)　①秋葉隆著『朝鮮民俗誌』六三書院　昭和29.3.3 (p.11－p.156を参照)

秋葉隆氏は、家祭と村祭を取り上げ、男女性別の角度から朝鮮社会は言語、文化の「二重組織」から構成されていると論じている。

②依田千百子著『朝鮮民俗文化の研究』瑠璃書房　昭和60.3.25 (p.145を参照)

依田千百子氏は、朝鮮に於ける中国の年中行事を受容する上で「上層階級では中国の行事そのままの受容をなしているが、他方、一般民衆は類似の固有の行事をもって理解・代行している、いわば二重構造的受容」の特徴があると指摘している。